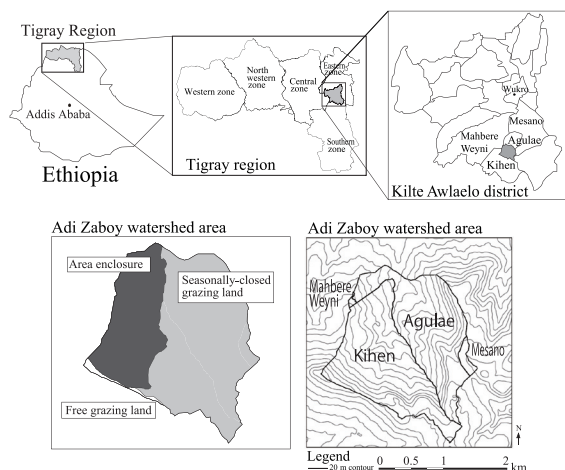


エチオピア・ティグライ州東部の高地における土地囲い込み下の *Vachellia etbaica* 林短期間バイオマス変化について

Reference: TAKENAKA et al. (2022) Short-term biomass change of a *Vachellia etbaica* stand in a closed area in the highlands of eastern Tigray, Ethiopia: A case study, JAALS 32(2):37-52



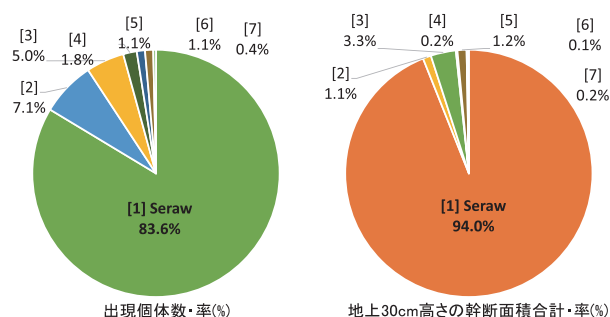
対象地域：エチオピア北部ティグライ州キルテ・アウラエロ郡
アディ・ザボイ地区（作図：平田・小川）



Seraw (*Vetbaica*) と呼ばれるマメ科低木が二次林の主林木となる

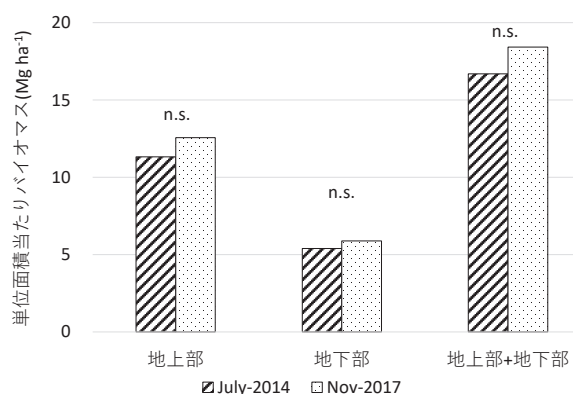


土地囲い込みにより Seraw 疎林は優占群落を形成した。
「アディ・ザボイ」とはハイエナのいる谷を意味する。



凡例：[1] *Vachellia etbaica* (235), 現地名 "Seraw"
[2] *Searsia pyroides* var. *pyroides* (20), [3] *Acacia saligna* (14), [4] *Carissa spinarum* (5),
[5] *Euclea racemosa* subsp. *schimperii* (3), [6] *Gymnosporia senegalensis* (3),
[7] *Jasminum grandiflorum* (1)
注：[No.] グラフラベル番号, 学名, () 出現個体数を表す

囲い込み開始後に出現・成立した二次林の構成樹種個体数, 幹断面積とも Seraw 木が優占している



注: 'n.s.' は有意差のないことを表す ($\alpha=0.05$, two-tailed Student's t-test)

3年4ヵ月のバイオマス増加はほぼなく, 囲い込みの本木植物資源への効果達成は場所により危ぶまれる



農村では現在も薪炭を主な生活燃料とするが, 近代的燃料の導入なく住民生活は今後成り立つのだろうか?

秋季シンポジウム「遊牧を考える—過去・現在・未来」開催報告

天壤無窮（あめつちさわりなかるべし）。これを本シンポジウムのテーマになぞらえれば、「天壤」は気候—草原（遊牧）生態系、「無窮」は永続性を意味するだろう。このような問題意識から、シンポジウム「遊牧を考える—過去・現在・未来」を温泉地・湯河原にて2022年10月15日に開催した。

遊動と牧畜が結びついた生業、数千年にわたる辺境地の生活、広く薄い草原利用、それが遊牧である。各界のスペシャリストが、遊牧の過去・現在・未来を俯瞰することで、その起源・原理・持続性に迫り、「遊牧の行く先はどこか、持続的遊牧は可能なのか」を問いかけた。過去～未来セッションを通して、およそ1万年前から今世紀末までのタイムトラベルとなった。

冒頭で、森尾会長とBakyei教授（モンゴル生命科学大学）による開会挨拶、Altanchimeg博士（モンゴル生命科学大学）、Ariunaa博士（モンゴル国家非常事態庁）、Saruul女史（モンゴル科学アカデミー地理地生態学研究所）の挨拶、篠田・大会実行委員長による趣旨説明が行われた。

その後、過去セッションでは、「遊牧のはじまり—モンゴル考古学から—」（白石）、「近現代史から考える—遊牧実践に付与された諸条件—」（尾崎）、現在セッションでは、「エージェントモデルで考える—家畜行動と牧草資源の時空間的相互作用—」（宮坂）、「野生動物の遊動から考える」（伊藤）、未来セッションでは、「気候の将来予測から考える—地球システムモデルによる植生活動予測—」（立入）、「国際情勢から考える」（小宮山）の発表が行われた。

セッション司会者が担当セッションのまとめをしたあと、総合討論では、さまざまな視点からの意見が出された。最後に、鈴木副会長より閉会挨拶があった。会議で出された意見には、現代的科学技術が伝統的生業（遊牧）の持続性にどう役立つのかに注目すべき（森尾）、各行政区の家畜数を牧養力内に収めるために、課税・補助金を採用し、家畜の健康を保持することで、食肉輸出を増やすことが重要（Bakyei）、持続可能性とは、現代的叡智を使ってさまざまな変化へ対応できること（鈴木）、モンゴルのような寒冷乾燥地と亜熱帯乾燥地の遊牧の違い（たとえば、気候変動や政治的背景）にも注目すべき（牛木）、などがあった。

本シンポジウムは、篠田が研究代表者を務める、科研費・基盤研究（A）「多重時空間エージェントモデルが拓く遊牧の科学」、国際共同研究強化（B）「気候・社会変動適応のためのモンゴル遊牧ビジョン2050」のメンバーとつながりの強い研究者らが企画・実施した。モンゴルにおける遊牧という限定されたテーマにもかかわらず、現地では21名（モンゴル人4名を含む）、オンラインでは37名（学会員以外も多数）、計58名の参加者を得た（写真）。

宿泊施設付きの会場は温泉地・湯河原に位置し、ミカン畑に囲まれた温暖な傾斜地中腹にあった。会議後には、懇親会、2次会、大浴場という場面で、議論の続きが行われ、よもやま話に花が咲いた。このように、会議の余韻を楽しみつつも、発表者が寄稿する予定の学会誌小特集の企画についても深めることができた。モンゴル人参加者は近くの日帰り温泉を満喫した。

なお、本会議とは別に、翌日には、同会場において、モンゴルにおける遊牧持続性の議論をユーラシア全体に展開する意図から、シンポジウムに参加した日本人・モンゴル人に、トルコ人・中国人研究者（オンライン参加）が加わって、“Trans Eurasian Workshop: From Vision to Actions Towards Sustainability”を開催した。



（文責：篠田雅人）

日本沙漠学会 2023 年 第 34 回学術大会開催のお知らせ（第二報）

1. 大会予定概要

【日時候補日】2023 年 5 月 27-28 日（土 - 日）

【会場】ホテルメリージュ 大ホール 鳳凰（27 日 公開シンポジウム & 学術大会）

<https://www.merieges.co.jp/>

宮崎大学キャンパス 330 記念交流会館（28 日 学術大会）／

<http://www.miyazaki-u.ac.jp/access/kibana/>

<https://www.of.miyazaki-u.ac.jp/330anniv/330hall/shiryou/sisetupanfu.pdf>

【公開シンポジウム】宮崎から見る世界の農業・防災・エネルギー

西岡賢祐（太陽光）

川崎典子（防災教育）

多炭雅博（農業気象）

【エクスカーショーン】青島－堀切峠－鵜戸神宮

2. 研究発表申し込み

【発表申込 Web ページ】

<https://www.jaals.net/> 大会 - シンポジウム /2023- 大会 - シンポジウム / 第 34 回大会発表申込 /

発表申し込み締め切り：2023 年 2 月 25 日（土）

要旨締め切り：2023 年 3 月 25 日（土）

【口頭発表】会場での口頭発表

【ポスター発表（ショートプレゼンテーション）】

会場でのポスター掲載

発表形式は口頭もしくはポスターのいずれかとします。

3. 参加申し込み（総会出欠確認）

【参加申込】後日お知らせいたします

4. 参加費

【発表者参加費】一般 4,000 円； 学生 2,000 円（支払方法は追ってご連絡いたします）

【懇親会費】一般 6,000 円； 学生 3,000 円

5. 事務局

第 34 回 日本沙漠学会学術大会実行委員会 事務局

〒889-2192 宮崎市学園木花台西 1 丁目 1 番地

宮崎大学工学部 工学科 土木環境工学プログラム 教授 入江 光輝 [委員長]

TEL：0985-58-7341

E-mail：jaals2023@gmail.com

詳細はホームページ <https://www.jaals.net/> をご覧ください。

沙漠工学分科会 2022 年度シンポジウム

沙漠工学分科会 2022 年度シンポジウム 極乾燥地域ジブチにおける持続可能な農牧業を目指した共同研究 Collaborative Studies for Sustainable Agropastoral of Extremely Dry Environment in Djibouti

- 主催：日本沙漠学会沙漠工学分科会
- 共催：東京農業大学総研研究会・沙漠緑化研究部会
東京農業大学沙漠に緑を育てる会
- 日時：2023 年 3 月 8 日（木）14：00～17：00
- 開催方法：ハイブリッド（Zoom でのオンライン配信あり）
Zoom アドレス情報は Web ページでお知らせいたします
<https://www.jaals.net/大会-シンポジウム/2023-大会-シンポジウム/2022 年度沙漠工学分科会シンポジウム/>
- 開催場所：東京農業大学世田谷キャンパス・サイエンスポート 8F エアブリッジ
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1 東京農業大学
- 参加費：無料
- 開催趣旨：

東京農業大学とジブチ大学をメイン・パートナーシップとして、SATREPS プロジェクト研究を 2019 年からスタートさせましたが、2020～2021 年の新型コロナウイルス感染症により、現地調査調査・共同研究が実質ストップしてしまいました。2022 年から共同研究を再開することができ、今回ジブチ大学の研究者を招き SATREPS の 2022 年度の共同研究の成果の一部を共有し、今後の共同研究の課題について論じる機会としたいと考えています。皆様のご参加をお待ちしております。

プログラム（仮）

開会挨拶：森尾貴文（日本沙漠学会 会長 / 筑波大学 教授）

開催趣旨：田島 淳（日本沙漠学会沙漠工学分科会会長 / 東京農業大学 教授）

成果発表

Overview of the SATREPS project studies

Sawahiko Shimada (Tokyo University of Agriculture)

Discovery of Spirulina in Lake Abbe in reference to its distribution in East Africa

Ibrahim Souleiman Abdallah (University of Djibouti)

The chemical composition of the Djiboutian water resources

Idil Mouhoumed Elmi (University of Djibouti)

Agroresources in Djibouti

Abdillahi Houssein Abdallah (University of Djibouti)

Grazing capacity parameters collected from Ali Sabieh rangelands in Djibouti

Rikako Kimura and Akira Kurosawa (Tokyo University of Agriculture)

Sustainable Agro-pastoral experimental field establishment in Douda, Djibouti

Fumio Watanabe and Atsushi Sanada (Tokyo University of Agriculture)

閉会挨拶：豊田裕道（東京農大総研研究会沙漠緑化研究部会会長）

司会進行：鈴木伸治（日本沙漠学会 副会長 / 東京農業大学 教授）

「日本モンゴル青年植樹交流団への参加報告記」

八木風輝（国際農林水産業研究センター）

2022年はモンゴル国と日本の国交樹立50周年であり、それを記念した交流行事が開催されている。その一環として、「日本モンゴル青年植樹交流団」が結成された。活動期間は、2022年9月26日から9月30日である。この団の目的は、モンゴル国における砂漠化防止、植林政策、環境保護に関する関係者との意見交換、交流、関連視察である。特に、モンゴル国政府が2021年末から開始した「10億本の植林運動」に関する関係者との交流に焦点を当てた企画であった。参加者は、団長の吉川賢・岡山大学名誉教授を筆頭に、自然科学および社会科学の大学院生、研究者、実務者10名と企画事務局3名の計13名であった。

「10億本の植林運動」は、フレルスフ・モンゴル国大統領が2021年11月の第76回国際連合総会で気候変動及び砂漠化対策として提案した構想である。現在、大統領の主導で、モンゴル国内での植樹インフラを整備する活動が進められている。以下、移動日（9月26日と30日）を除く各日程に沿って、実施内容を説明したい。

9月27日午前：自然環境観光省付属森林研究・開発センター

センター内で「10億本の植林運動」を担当するガンゾリグ氏が「10億本の植林運動」の概要を説明した。「10億本の植林運動」では、現在8%を占める国土の森林面積を、2030年までに9%に増やすことを目的に、現在15億本の木を植える予定でいる。具体的な活動内容は、3つのフェーズから構成される。第1フェーズ（2023年から2024年）では、公園整備やアグロフォレストリー分野、第2フェーズ（2025年から2027年）では森林再生及び、河川周辺の植生回復、第3フェーズ（2028年から2030年）では、グリーンインフラの整備と砂漠化による土壌劣化の防止に向けた植林を実施する予定だそうだ。

9月27日午後：ホスタイ自然公園（トゥブ県）

昼食後、団員たちはウランバートル市内からホスタイ自然公園に向かった。この公園は、モウコノウマ（Przewalski's horse）の保護を行っており、現地の牧民たちと協働で牧草地を管理する運営方法が特徴であるという。その後、実際に公園内を車で移動しながら、モウコノウマの見学に出かけた。

9月28日午前：JICA モンゴル事務所

モンゴル国で実施されているJICAプロジェクト環境分野の内容に関して説明を受けた。その中でも、SATREPSの「遊牧民伝承に基づくモンゴル草原植物資源の有効活用による草地回復」と「東ゴビ砂漠における深穴方式による乾燥寒冷地緑化推進協力事業」に関して具体的な説明があった。

9月28日午後：モンゴル国科学アカデミー植物研究所・植物園

当該植物園は、ウランバートルの南東部に位置し、18平方メートルのうち、市民の観賞区域と調査研究区域に分けられている。団員たちは、I. トゥブシントグトフ所長とN. オチゲレル研究員からアカデミーと植物園に関する説明を聞いた後、シベリアカラマツ10数本を観賞区域に植えた。この様子は、モンゴル国科学アカデミー植物研究所の公式HPに掲載されている

(https://botany.ac.mn/c/r?content=3175736&fbclid=IwAR0KTSK_D7wEz2_RnBFm678XHpMIqT1sROsb8eu-upsx0YqdChQctp4CxDM)。

9月29日全日：モンゴル国立大学演習林（バトスンベル郡：写真1）

午前中から団員たちは貸し切りバスで、ウランバートル北部にあるモンゴル国立大学の演習林に移動した。演習林では、モンゴル国立大学のN. パータルビレグ教授とS. ビャンバゲレル講師が「10億本の植林運動」に関する植樹場所と植樹する木の選定について説明した。樹木の選定に関しては、生態学的かつ生物学的な実験結果を基準に行うという。その内容には、植物の根の深さ、地域の寒暖差、風に対する強度が含まれている。説明の後、団員たちはパータルビレグ先生と共に演習林内を移動し、森林火災後のカラマツの植生の変化に関してお話を伺った。

以上、交流団の活動を通じて、現在のモンゴル国を取り巻く環境問題に関する現状を確認することができた。有意義だったのは、筆者の関心事であった植樹時の場所と木の選定に関して、学術的に発信している研究者たちから話を聞くことができた点である。

最後になりますが、本プログラムの計画と実施を担当してくださりました在モンゴル国日本大使館様、公益財団法人日中友好会館様、本交流団のプログラムに関わってくださったモンゴル国側の関係者の皆様、団長としてチームを引っ張ってくださった吉川賢先生、そして団員の皆様に深く感謝申し上げます。



写真1 モンゴル国立大学演習林内で森林火災にあったタイガ林

日本沙漠学会 2023～2025 年度評議員の選挙について（会告）

2022 年 12 月 9 日

日本沙漠学会 正会員・名誉会員 各位

日本沙漠学会選挙管理委員会

委員長 島田 沢彦

11 月 28 日締切による新規評議員候補者の推薦について、5 名の候補者が確定いたしましたので、日本沙漠学会会則および内規に従い、2023～2025 年度評議員の選挙を下記要領にて実施いたします。正会員および名誉会員各位のご投票をお願い申し上げます。

記

1. 選挙人の資格：日本沙漠学会正会員および名誉会員
2. 被選挙人：下記に掲げる、現評議員（※ 29 名）ならびに新規被推薦者（5 名）の計 34 名
※名誉会員となられました牛木会員は今回の選挙から評議員候補者となりません。
3. 選挙方法：
 - 1) 本会告に同封の投票用紙を用いること。
 - 2) 候補者氏名から 25 名以内を選び、右欄に○印を付す。
※ 25 名を越えると、すべての投票が無効になります。
 - 3) 投票用紙を同封の封筒（内封筒）に入れ糊付けする。この封筒には何も記載しない。
投票用紙を封入した内封筒を、返信用封筒に入れて返送する。
4. 投票締切日：2023 年 1 月 13 日（金）（当日必着）
5. 郵送先：〒 156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学国際食料情報学部国際食農学科内
日本沙漠学会選挙管理委員会 篠原 卓 宛
6. 開票日：2023 年 1 月 16 日（月）18：30～
7. 開票所：東京農業大学 世田谷キャンパス・サイエンスポート 6 階 S612 室
<https://www.nodai.ac.jp/campus/map/setagaya/>
開票立会希望者は、選挙管理委員会（t3shinoh@nodai.ac.jp）まで事前にお申し出下さい。

[2023～2025 年度 評議員候補者]

安部 豊	石川祐一	入江光輝	* 柏木健一	* 川田清和
川端良子	北村義信	小島紀徳	児玉香菜子	小長谷有紀
酒井裕司	真田篤史	* 篠田雅人	篠原 卓	島田沢彦
菅沼秀樹	鈴木伸治	高橋新平	田島 淳	田中 徹
豊田裕道	縄田浩志	* 檜谷 昂	平田昌弘	藤巻晴行
* 星野仏方	的場泰信	三木直子	森尾貴広	森 卓
矢沢勇樹	依田清胤	渡邊文雄	渡邊三津子	(* 新規候補者)

学会賞審査委員会からのお知らせ 日本沙漠学会若手会員のみなさんへ

学会賞担当理事 渡邊 三津子
的場 泰信

日本沙漠学会では「奨励賞」「ベストポスター賞」を、若手研究者のみなさんを対象とした賞として設けています。

奨励賞

- 乾燥・半乾燥地に関する萌芽的研究業績を挙げた会員に授与されます。
※ 『沙漠研究』に掲載された論文や研究業績に基づき、自薦または学会員の推薦を受けて審査されます。
- 満35歳以下の若手会員、博士課程在籍者または博士課程修了後10年以内の会員を対象としています。※ 社会人経験者など「若手相当」とみなされる方は満35歳以上であっても対象となります。

ベスト ポスター 賞

- 研究内容、表現や説明技術、熱意などが優れているポスター発表に対して授与されます。
- 学術大会でポスター発表をする満35歳以下の学部生、大学院生と大学院修了・中退後3年未満の会員が対象となります。※ 社会人経験者など「若手相当」とみなされる方は満35歳以上であっても対象となります。

メリット① 自分の研究について知ってもらえる

受賞者の研究は、学術大会だけでなくホームページなどで紹介されるので自分の研究について多くの人に知ってもらえる機会になります。

メリット② 履歴書に書ける

「奨励賞」「ベストポスター賞」をもらったら、履歴書の賞罰の欄に記載できるので、就職活動にも役立ちます。

日本沙漠学会に所属する若手会員の皆さん
全員にチャンスがあります！

学術大会で発表した人は、ぜひ
『沙漠研究』に論文を投稿しましょう！

2022 年度学会賞受賞候補者推薦のお願い

日本沙漠学会正会員 各位

日本沙漠学会会長 森尾 貴広
学会賞審査委員会委員長 渡邊三津子

日本沙漠学会細則第 34 条にもとづき、日本沙漠学会賞（学会賞，学術論文賞，進歩賞，奨励賞の 4 賞）を公募いたします。つきましては、学会賞受賞候補者を下記の要領で推薦（奨励賞については推薦または自薦）下さいますようお願い申し上げます。

記

1. 学会賞の種類

- (1) 日本沙漠学会学会賞 : 本学会において学術かつ事業活動に顕著な業績を挙げた会員に授与する。
- (2) 日本沙漠学会学術論文賞 : 「沙漠研究」に掲載された論文により乾燥・半乾燥地に関する学術上の顕著な業績を挙げた会員に授与する。
- (3) 日本沙漠学会進歩賞 : 乾燥地・半乾燥地に関する技術的，実践的な業績を挙げた会員または会員を含む団体に授与する。
- (4) 日本沙漠学会奨励賞 : 乾燥地・半乾燥地に関する萌芽的研究業績を挙げた会員に授与する。この場合の受賞者は、当該年度において 35 歳以下の会員，博士課程在籍者または博士課程修了後 10 年以内の会員とする。

2. 推薦期限 **2023 年 2 月 28 日（火） 当日消印有効**

3. 推薦方法

以下の書類を期限までに学会賞審査委員会（幹事）宛に郵送して下さい。なお奨励賞のみ，推薦に加えて自薦も可としますが，その場合には，本人の業績について照会可能な 2 名以上の所属・連絡先を添付してください。

(1) 日本沙漠学会学会賞ならびに日本沙漠学会進歩賞を推薦する場合

様式 1 の推薦書 1 部
推薦に関する資料 1 組

(2) 日本沙漠学会学術論文賞を推薦する場合

様式 2 の推薦書 1 部
推薦に関する業績 1 組

(3) 日本沙漠学会奨励賞を推薦する場合

様式 2 の推薦書 1 部（または，様式 3 の自薦書）
推薦・自薦に関する業績 1 組

4. 宛先（照会先）

〒104-0033 東京都中央区新川 2-22-4 共立ビル 2F
日本沙漠学会 学会賞審査委員会 幹事 的場泰信
E-mail : matobaji@icloud.com

5. その他

応募された書類は返却しませんので，必要な場合は写しを保管下さい。

なお，過去の受賞者については日本沙漠学会ホームページ（<http://www.jaals.net/>）をご参照下さい。

様式 1

(日本沙漠学会学会賞・日本沙漠学会進歩賞用) 令和 年 月 日

日本沙漠学会学会賞ならびに日本沙漠学会進歩賞推薦書

1. 推薦者 所属：
氏名： 印
住所・電話：
2. 被推薦者 所属：
氏名： 生年 年 月 日
住所・電話：
入会年：
3. 推薦業績 題目：
4. 推薦理由
5. 推薦業績に関する資料リストなど

様式 2

(日本沙漠学会学術論文賞・日本沙漠学会奨励賞用) 令和 年 月 日

日本沙漠学会学術論文賞ならびに日本沙漠学会奨励賞推薦書

1. 推薦者 所属：
氏名： 印
住所・電話：
2. 被推薦者 所属：
氏名： 生年 年 月 日
住所・電話：
入会年：
3. 推薦業績 題目：
4. 推薦理由
5. 推薦業績に関する資料リストなど

著者名（共著の場合は全員）、題目、掲載誌名、巻号、頁、発行年を記載すること。

様式 3

(日本沙漠学会奨励賞用) 令和 年 月 日

日本沙漠学会奨励賞自薦書

1. 自薦者 所属：
氏名： 印
住所・電話：
2. 自薦者の業績について問い合わせ可能な照会者
照会者 1 所属：
氏名： 生年 年 月 日
住所・電話：
入会年：
照会者 2 所属：
氏名： 生年 年 月 日
住所・電話：
入会年：

※ 照会者が 2 名以上いる場合には、適宜様式をコピーして記入してください。

3. 自薦業績 題目：
4. 自薦業績に関する資料リストなど
著者名（共著の場合は全員）、題目、掲載誌名、巻号、頁、発行年を記載すること。

-----記入上の注意-----

- 1) 書 式 A4 縦置横書き, 明朝体 12 ポイント, 上下左右マージン 2.0 cm 以上, 1 行文字数 35~40 字, 1 ページ行数 35~40 行
- 2) 被推薦者 被推薦者が団体の場合は団体名およびその代表者を記入して下さい.
- 3) 推薦理由 箇条書きの場合は約 100 字以内で説明して下さい.
箇条書きでない場合は全体を 400 字程度で記載して下さい.
- 4) 様式 1 「日本沙漠学会学会賞・日本沙漠学会進歩賞」の場合 5. 資料はコピーなどを添付して下さい.
- 5) 様式 2,3 「日本沙漠学会学術論文賞・日本沙漠学会奨励賞」の場合 5. 業績リストは研究業績の別刷り(コピー可)を添付して下さい.

書評

堀田あゆみ・渡邊三津子・鈴木康平編著
「モンゴルにおける木材利用と森林後退」



刺激に満ちた研究成果が出版された。
まず本書の構成を紹介してみよう。

- 序 章 木へのまなざし（小長谷有紀）
- 第1章 絵図と古写真から読み解くウランバートルの景観（渡邊三津子）
- 第2章 都市の拡大と木材利用（八尾廣）
- 第3章 ハンガイ地域における遊牧民の森林資源利用（堀田あゆみ）
- 第4章 社会主義時代のモンゴルにおける木材の生産と消費（滝口良）
- 第5章 屋根付き牧柵の浸透－木材消費の現場としての牧畜社会（辛嶋博善）
- 第6章 森林の変遷（鈴木康平）
- 終 章 森へのまなざし（山中典和）

この書評においては、各章に対する言及をあえて避け、本書全体が読者に与えた刺激的要素を整理してみたい。それは、本書を手にする読者の楽しみを奪わないようにとのささやかな願いゆえのことである。

第一の刺激は、現地調査をおこなうことが困難なコロナ状況下における研究のあり方を示したことである。コロナ禍において、現地調査のリズムが崩れてしまっているフィールドワーカーは少なくないはずである。持て余

した時間を、これまでの調査データの整理や論文執筆にあてようともくろんだものの、それが思い通りに進まない。少なくとも評者はそのような状況を過ごしてきた。本書が示したのは、コロナ状況下における研究の進め方の恰好の事例であり、「知恵と工夫があれば、どのような状況下においても研究ができる」ことを示している。

第二は、近年その重要性が認識されはじめているデジタルアーカイブの具体的活用事例を示したことである。評者が関わる地域研究デジタルアーカイブ事業では、これまで多数の写真のデジタル化、データベース化に取り組んできた。デジタルアーカイブの重要性は広く認識されはじめているようだが、まだまだ発展途上の取り組みであり課題は多い。本書が提示した、デジタルアーカイブ画像を通した可視化をともしう社会・文化変容の研究は、地域研究において将来的に大きな発展が期待できるという確信をもった。

第三は、「牧畜社会における木材利用」という斬新なテーマ設定にある。木材利用と関連した森林後退という着目点も読者に環境問題に対する理解をもたらす。これまでの牧畜文化・社会研究において、そこに木材・森林利用が絡んでいることに焦点をあてること研究は、あったとしてもごく稀であった。本書で論じられているように、森林の密接な関係が牧畜文化・社会の重要な一面であることに読者はあらためて気づかされるであろう。ウランバートルの前身が森林資源の減少にともなって28回もの移動を経たという指摘は、移動を常態とする牧畜世界における都市のありかたとしてまことに興味深い。「牧畜社会における木材利用」に対する理解は、砂漠化の要因として問題視される牧畜・牧畜民に対してこれまでとは異なる評価にもつながっていくのではないだろうか。

本書の研究が成立しえたのは、デジタル化された画像のみを静的に考察したからではない。執筆者諸氏がこれまで地道に継続させてきたフィールドワークがその基盤に存在し、そこで集められた諸データにデジタル化画像の考察をくわえることによって、通時的可視的な論考が成立していることは、本書の各章を読んでみれば理解できる。この点は、デジタル時代においては忘れてはならない重要なことである。デジタル技術が現代社会の諸問題、新たな研究手法の確立に資することには異論はない。しかし、その基盤には人間や自然の根源的な様態があることを忘れてはならない。それを提示できるのが、執筆者各氏による地を這うようなフィールドワークの成果なのである。本書を読み終えて、あらためてそう考えた。

また、本書の執筆者は、人文科学系研究者を中心としながらも、自然科学等を専門とする研究者もその専門分野の観点からの論考を寄せている。文化人類学、地域研究を専門とする評者はこれまで記した点において本書を高く評価するわけであるが、他の文系・理系分野を専門とする方々にとって、本書の試みがどのようにうつるのか、機会があれば感想をお聞きしてみたい。

（石山 俊）

学会記事

日本沙漠学会 2023 - 2025 年度役員選挙管理委員会報告 (第一報)

➤ はじめに

- ・日本沙漠学会会則第 9, 10 条, 細則第 2 章, 内規第 8 条に従って, 2020-2022 年度役員選挙が行われた。
- ・第 154 回理事会 (2022 年 7 月 16 日) において, 選挙管理委員の選出が会長に一任され, 島田沢彦会員 (810), 箭内多聞会員 (872), 篠原卓会員 (937), 橘隆一会員 (994), 寄立徹会員 (1065) を委員とした (第 155 回理事会承認)。

➤ 第 1 回選挙管理委員会議事録

日 時: 令和 4 年 10 月 8 日 (土) 13:30~14:00

場 所: Web 会議室

出 席: 島田沢彦, 箭内多聞, 篠原卓, 橘隆一, 寄立徹
オブザーバ: 森尾貴広, 鈴木伸治, 齋藤哲治

議 題:

1. 選挙管理委員長の選出
東京農業大学 島田沢彦 会員に決定した。
2. 選挙日程確認
 - (1) 評議員選挙
 - ・おあしす (9 月号) と学会 HP で公示 (名簿は郵送のみ), (現職以外) 推薦依頼。
 - 有権者名簿の作成 (正会員 + 名誉会員) ただし, 3 年以上未納の会員を除く
(2017~2019 年度役員選挙管理委員会からの申し送り, 第 127 回理事会議事録参照)。
 - ・現評議員 (30 名) に加える 5 名以内の新規候補者を決定する。新規候補者に確認をとる。
(推薦者が 10 名以上あった方) 11/30 締め切り。12/5 新規候補者の決定。
 - ・おあしす (12 月号) と学会 HP で公示 + 郵送。投票用紙同封。1/13 締切。1/16 開票。
(25 名の評議員を決定, 承諾書送付)
 - (2) 会長選挙
 - ・評議員 25 名に投票用紙送付 2/17 締切。2/20 開票。
 - (3) 理事選挙
 - ・25 名の評議員へ投票用紙送付 3/17 締切。3/22 開票。
 - (4) 新会長指名評議員 5 名, 会長指名理事 2 名の追加選任。
 - (5) 新会長による副会長 2 名の指名。

- (6) 新理事会による監事 2 名の選任。
- (7) 総会 (5 月) で承認。
- (8) 承諾書 (会長名で副会長, 理事, 評議員に) および委任状 (希望者) の送付と受取り。
- (9) 選挙管理委員会の解散。

3. 選挙人名簿作成について

共立に作成を依頼, 9 月号に同封する。

4. その他

- (1) 選挙管理委員会送付先は, 以下とする。
東京農業大学国際食料情報学部国際食農学科内
日本沙漠学会選挙管理委員会 篠原 卓 宛
- (2) 次回 12 月 5 日 (月) 18:30~

➤ 第 2 回選挙管理委員会議事録 (抜粋)

開催日時: 令和 4 年 12 月 5 日 (月) 18:30~19:30

場 所: 東京農業大学世田谷キャンパス・サイエンス
ポート S-612

出席者: 島田沢彦, 箭内多聞, 篠原卓, 橘隆一

Web 参加: 寄立徹

議 事:

1. 評議員選挙候補者の決定
 - ・38 通の推薦があった。
 - ・10 名以上の推薦があった被推薦者は 7 名であった。
内規第 8 条に従い, 推薦者数の多い順に 5 名を評議員選挙の新規候補者に決定した。
 - ・現評議員 (30 名) から評議員資格を喪失する名誉会員を除外した 29 名に, 確認をとったうえで新規候補者 5 名を加えた, 計 34 名を被選挙人とすることを確認した。
 - ・評議員候補者 (被選挙人) は下記の通り。

安部 豊	石川祐一	入江光輝	* 柏木健一
* 川田清和	川端良子	北村義信	小島紀徳
児玉香菜子	小長谷有紀	酒井裕司	真田篤史
* 篠田雅人	篠原 卓	島田沢彦	菅沼秀樹
鈴木伸治	高橋新平	田島 淳	田中 徹
豊田裕道	縄田浩志	* 檜谷 昂	平田昌弘
藤巻晴行	* 星野仏方	的場泰信	三木直子
森尾貴広	森 卓	矢沢勇樹	依田清胤
渡邊文雄	渡邊三津子	(* 新規候補者)	
2. 選挙日程確認 (略)
3. その他
 - ・次回 1 月 16 日 (月) 18:30~

日本沙漠学会第 155 回理事会

日 時：2022 年 10 月 8 日（土）14：00～15：30

会 場：Web 会議

出 席：森尾貴広（会長）、鈴木伸治、田中徹（以上、副会長）、渡邊文雄（以上、監事）、高橋新平、矢沢勇樹、小島紀徳、石川祐一、渡邊三津子、的場泰信、田島淳、島田沢彦（以上、理事）、安部征雄（顧問）、真田篤史、篠原卓（以上、総務委員）、齋藤哲治（事務局）

オブザーバ：篠田雅人・甲野耀登（秋季シンポジウム大会実行委員長・幹事）、入江光輝（次回学術大会実行委員長）、橘隆一、箭内多聞、寄立徹（選挙管理委員）

委任状：小長谷有紀、川端良子、豊田裕道

議 題：

I. 審議事項

1. 秋季シンポジウム（2022/10/15@ レクトーレ湯河原）進捗および小特集

- ・シンポジウムの篠田実行委員長から、シンポジウムの準備状況や当日の日程について説明があった。
- ・日本沙漠学会以外の学会からの参加者も含め、10月3日時点で80名（19名が現地参加、61名はオンライン参加。）が参加予定である。4人の外国人研究者も招聘済みである。
- ・本シンポジウムの内容は沙漠研究の小特集に掲載予定である。

2. 第34回学術大会（2023/5/27-28@ 宮崎大学）について

- ・大会実行委員会の入江委員長から、第34回学術大会の準備状況について説明があった。
- ・5月27日は、総会、公開シンポジウムや情報交換会をホテルメリージュ（市中心部でアクセスが良い）で実施する予定である。参加人数によっては、27日も発表会を実施する。
- ・5月28日は、発表会を宮崎大学キャンパス（市中心部からバスで30分程度。チャーターバス使用。）で実施し、その後エクスカーショ（青島-堀切峠-鶴戸神宮）に出発する。
- ・宮崎県観光協会から補助金の支援を受け、会場のホテル代および移動時のバスのチャーター代に充てる予定である。
- ・島田総務理事から、開催2日間で別の会場を使用する理由について質問があった。入江委員長から、宮崎大学キャンパスが市中心部から少し離れるため、27日朝に宮崎入りする会員が大会に参加しやすいよう、初日はアクセスの良い市中心部のホテルを選

んだことが説明された。

- ・準備状況を踏まえ、森尾会長から初日（5月27日）の大会会場をホテルメリージュとすることが提案され、審議の結果承認された。
- ・島田総務理事から、大会の開催方法（完全対面あるいはハイブリッド開催）について質問があり、入江委員長から完全対面で実施予定であることが説明された。
- ・島田理事から、対面で実施する場合、ポスターのショートプレゼンテーションの実施の有無について質問があった。ショートプレゼンテーションの実施は、ポスターの内容を大まかに理解できるメリットがあるが、大会全体のスケジュールを調整する必要があるなどの意見があった。実施方法については今後検討を要するが、実施の有無について事前に参加者に連絡する必要があるため、ファーストサーキュラーではホテル会場でポスターセッションを実施するという連絡に留め、ショートプレゼンテーションを行う場合はセカンドサーキュラーで連絡することになった。
- ・発表申し込み締め切りは2023年2月25日（土）、要旨締め切りは2023年3月25日（土）の予定である。

II. 報告事項

1. 選挙管理委員について

- ・島田選挙管理委員長から、選挙管理委員の紹介があった。

810 正会員 島田沢彦（東京農大）

872 正会員 箭内多聞（光電製作所）

937 正会員 篠原卓（東京農大）

994 正会員 橘隆一（東京農大）

1065 正会員 寄立徹（オリコグローバル）

- ・島田委員長から、本日2022年10月8日に開催された第一回選挙管理委員会の内容と選挙日程について報告された。
- ・矢沢財務担当理事から、近年の会員数動向を鑑み、評議員の定足数、理事の任期（2期6年まで）など、今後検討すべき課題について質問があった。
- ・安部顧問から、Zoom会議を前提とし、所属場所の制限なく（会議のための長距離移動の負担を考慮する必要なく）評議員を選出する必要性が説明された。
- ・会長から、分科会を中心に評議員の推薦を検討する案も示された。また、例えば国際担当など担当理事の新設も提案された。
- ・今後、日本沙漠学会の中長期展望を踏まえ、別途検討することとなった。

2. DT-XV（ICAL）（2023/6/3-5）進捗

- ・森尾会長から、DT-XVの準備状況や実施スケジュール

ルについて報告された。

- ・場所はヨルダンの死海で、6月3日～5日の日程で実施される。
- ・安部顧問から、大会後の出版費用を日本側で確保するよう要望があった。森尾会長から、すでに実行委員会側に説明済みであることが報告された。
- ・石川理事から、DTに学生が参加する場合日本沙漠学会の会員である必要があるかどうか質問があり、森尾会長からその必要はないことが説明された。

3. 日本青年モンゴル植樹交流団活動

- ・森尾会長から、本事業に日本沙漠学会から若手研究者2名を派遣し、活動の後、無事に帰国済みであることが報告された。
- ・この2名の研究者には、レポートの執筆を依頼しており、今後のおあしすに掲載する予定であることが説明された。

4. 予算執行状況ならびに会員動向について

- ・矢沢財務担当理事から、7月以降の財務状況について説明があった。
- ・未納の正会員については、引き続き請求を行うことが説明された。

5. 地理学関係学連合運営委員会 (9/12)

- ・島田総務担当理事から、9月12日に実施された運営委員会の議事録の内容が共有された。
- ・地理学関係学連合として合同シンポジウムの開催が提案されていることが説明された。

6. 投稿論文審査状況報告

- ・小島編集担当理事から、投稿論文の審査状況について報告があった。
- ・現在、査読中の原著論文は1本であり、積極的な投稿が呼びかけられた。また、1本の原著論文が査読済みで、沙漠研究32巻2号に掲載され、J-STAGEにも公開済みである。

- ・DT14 プロシーディング号の進捗状況について説明された。また、沙漠研究32巻3号に、DT14のアブストラクトと大会委員長の学会報告を掲載する予定であることが説明された。

- ・矢沢理事から、掲載論文数の確保のために、編集委員で特集企画を提案するなどの案が示された。その案も含め、今後検討することとなった。

7. おあしす32巻2号について

- ・島田総務担当理事から、32巻2号の編集状況について報告された。
- ・表紙は、以前に鈴木副会長より提案があったように、既報論文のダイジェストを掲載した。

Ⅲ. その他

1. CADAL 報告

- ・石川企画担当理事から、11月9日に東京都北区赤羽会館講堂で「乾燥地と日本の食糧：供給源の構造変化にどう対応するか？」のテーマで開催されることが報告された。

2. 学会賞推薦書受付け期日について

- ・渡邊学会賞担当理事から、来年度の学会賞推薦書受付け期日は2023年2月28日であることが報告された。
- ・森尾会長から、学会賞の積極的な推薦が呼びかけられた。

- 3. 2023年度秋季シンポジウムは、沙漠工学分科会（農大に事務局）が担当することが説明された。

- 4. 石川企画担当理事から、次の大会開催候補地について推薦が呼びかけられた。

- 5. 島田総務担当理事から、学術大会の段取りについて資料が共有された。この資料は今後も更新し、総務担当理事間で引き継ぐことが説明された。

- 6. 第156回理事会は、2022年1月7日（土）14時からZoomで開催予定

* * * * * 会 員 動 向 * * * * *

●新入会員

正会員

山崎 由理 (ID: 1170) 鳥取大

●退会会員

学生会員

平松 勅悦 (ID: 1140) 岡山大

加藤 祥之 (ID: 1169)

脇田 怜奈 (ID: 1133) 東京農大

賛助会員・団体会員名簿

アースアンドヒューマンコーポレーション	194-0041	町田市玉川学園 8-3-23	Tel : 042-710-7661
株式会社ウイジン	158-0097	世田谷区用賀 2-12-14	Tel : 03-3700-0531
NTC インターナショナル株式会社	136-0071	東京都江東区亀戸 1-42-20	Tel : 03-6892-3401
株式会社大林組技術研究所	204-8558	清瀬市下清戸 4-640	Tel : 0424-95-1060
